



第 1 日
国 語
(9 : 30 ~ 10 : 20)

注 意

- 1 検査開始のチャイムがなるまで開いてはいけません。
- 2 問題用紙の1ページから13ページに、問題が一から四まであります。
これとは別に解答用紙が1枚あります。
- 3 問題用紙と解答用紙に受検番号を書きなさい。
- 4 答えはすべて解答用紙に記入しなさい。

受検番号	第	番
------	---	---

一次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

電車が動揺¹するごとに、老婆のからだは痛々しげに揺れていた。席を譲るか、譲らぬかは、まったく個人の自由であって、譲らぬことが必ずしも罪悪でないにしても、七十の老婆が——しなびきってつり皮にする力さえ、じゅうぶんではないかと思われるほどの老婆が、東京の大通りの電車の中で、席を譲られずにいるということは、それは決して愉快なる光景ではなかった。かれの感情を少しく誇張していえば、それは文明の汚辱であった。あさましく思わずにはいられなかった。かれは老婆の前後左右^{注2}一間ばかりの間に、恬然^{注3}として腰を掛けている乗客を、心からいやしませんが、否^{いな}自分たちが行っているのにもかかわらず、われているのにもかかわらず、否自分たちが行っているのにもかかわらず、老婆の存在にはほとんど気のつかぬように、平然として納まり返っている乗客の一群を、かれは心から憎みはじめたのである。

老婆の立っていることに対して、最も責任のある乗客は、老婆がそれに面して立っている、運転手台に向かって右側の座席の乗客でなければならなかった。かれは、かなり熱した目つきをしながら、その辺の乗客を、いちいち点検した。老婆のすぐ前にいる三人は、女連れの乗客であった。そして、まん中にいる女が、ちようどもを言いはじめたくらいの子をひざの上に抱えている。その女の子を、左右のふたりの女が、かわりがわりにあやしていた。この女の三人連れに老婆に席を譲らない責任を負わせるのは、少しく酷であった。中央に居るこどもを抱いている女に、席を譲ることを求めるのは、もとより無理であった。こどもをあ

つけた。かれは、自分の座席をもっていないことを、どれほど残念に思っただかしのなかった。

かれは老婆が不当に立たされていることを、電車が須田町から本石町辺まで走る間、憤慨し続けていた。婦人が立っている間は、男子はひとりも席に着かないという外国人の習慣などを思い出しながら、かれは老婆の付近に腰を掛けて居る乗客を、思う存分さげすんでいた。ことに二十四、五歳の男と、五十かっこの男とが、かれの憤慨の第一の的であった。

そのうちに、かれは憤慨に³疲れたとみえ、少しぼんやりした気持ちになりかけていた。そのときであった、電車は急に速度をゆるめたかと思うと、日本橋の停留場に止まった。電車が止まると、車内が急に動揺した。ふと、気がついてみると、例の三人の女連れは、いっせいに立ち上がって降りようとしている。かれは「席はあいたな」と、思った。そう思うと、かれはそこへ腰掛けたいと思って、つり皮を持っている手を離して、そのほうへ動こうとした。そのときに、かれは自分よりも先に、さっきの老婆が^{注4}惶惶として、飛びつくように、そのあいた座席にすがりついているのを見たのである。

それを見ると、かれは自分が作っておいた落とし穴の中へ落ち込んだように、絶望的な驚きを感じた。かれはいつの間にか自分自身、老婆の存在を忘れていたのである。老婆に対する周囲の冷淡さ、無情さを憤慨しているうちに、その憤慨のもとである老婆のことは、いつの間にかおろすになっていたのである。あれほど、老婆のために席がないことを悲しんでいたかれは、老婆のために席が作られたせつな、老婆のことは

やすという無邪気な仕事のために、老婆の存在に気のつかない左右の女をとがめるわけにもいかなかった。かれは、この三人の女を、心のうちで放免して、女たちの両側を点検した。かれに近い側にいるのは、二十四、五ばかりの男であった。位置からいっても、年輩からいっても、この男が最初に老婆に対して、席を譲らなければならぬにもかかわらず、かれは老婆の存在などは、てんで眼中にないごとく、視線を固定したままで何やら考えている。女たちの向こう側にいる男は、もう五十に近い男だが、老婆に席を譲るべき^{注5}屈竟の位置にあるにかかわらず両足をふんぞり伸ばしたまま、平然とすわっている。かれは、このふたりの男を最も多く軽蔑したが、このふたりの男の右と左にも、かれの軽蔑に^{注6}耐える屈強な——つり皮につかまって立つ能力のある男が、幾人も並んでいるのだ。

また、たとえ老婆が背を向けて、立っतीयうとも、その向こう側の座席の人たちも、老婆に席を譲るべき責任を、忌避すべきはずのもではなかった。しかも、向こう側の席にいる乗客は、どの男もどの男もみな、つり皮につかまるには、少しの故障ももっていない人たちはばかりであった。

もつとも、老婆の周囲には、乗客がごたごたと、立ちこんでいるので、老婆の存在が、かれらのすべてに意識されているかどうかは疑問であったが、とにかく席を譲る資格——立っているかれには、その資格は絶対になかった——をもっている十人に余る乗客が、ひとりもこの衰えた老年の婦人に席を譲らないということが、かれの心をかなり痛々しく傷

いつの間にか忘れていて、自分がそこへすわろうとしたのである。おそらく老婆が、惶惶として席に着いたのは、かれを競争者として、座席を奪われることを恐れたためであったかもしれない。

※1 そのとき、かれの良心は、明らかにべそをかいていた。かれは不快な^{注7}蕭条たる気持ちにならずにはいなかった。かれの負け惜しみは、老婆のために、憤慨していたほうが、かれの心の第一義的な状態で、席があいたせつな、そこへすわろうとした心は、それは発作的なでき心だと解しようとした。が、そうした解釈でもって、かれの心は少しも慰まなかった。

二十四、五の男や、五十かっこの男が、席を譲らないことを憤慨したのが、かれらに対してあいすまぬように思われてしかたがなかった。老婆に対して席を譲らないことを、憤慨したのも、それは老婆そのものためではなくして、自分の道徳的意識がその事実によって、傷つけられたことよっての憤慨であって、まったく利己的なものであるかわからないと思った。

かれはすっかりしよげてしまっていた。かれの行動が、だれに見あらわされたわけでもなく、だから非難されたわけでもなかったが、それはすました顔をしながら、何か悪事をしようとしたところをうまくしっぽをつかまれた感じと、少しも異なっていなかった。 ※2

(菊池 寛 「我鬼」による。)

- (注1) あさましい || 品がなくて見苦しい。
 (注2) 一間 || 約一・八メートル。
 (注3) 恬然 || 周りを意識せず平気であるさま。
 (注4) 屈竟 || きわめて都合の良いこと。
 (注5) 愴惶 || 慌てるさま。
 (注6) せつな || 瞬間。
 (注7) 蕭条 || ものさびいさま。

5 絶望的な驚きを感じたとあるが、この描写について、国語の時間に生徒が話し合いました。次の【生徒の会話】はそのときのもので、空欄Ⅱに当てはまる適切な表現を、かれが老婆の行動を見て気付いた事実に触れて、「……に気付き、……と思った」という形式によって書きなさい。

【生徒の会話】

早川… 「絶望的な驚きを感じた」とあるけれど、どのようなことを感じたのだろう。「絶望的」というのだから、かれにとつては、かなりショックだったということかな。

山田… そうだね。直前には「自分が作っておいた落とし穴の中へ落ち込んだように」とあるから、うっかりしていて自滅してしまつたという感じのショックだと思うよ。

早川… 具体的にはどういうことかしら？

山田… 「絶望的な驚き」のきっかけは、具体的にいうと、愴惶として席にすがりつく老婆を見たことだね。

石原… そう考えていくと……「絶望的な驚き」とは、当初は老婆のことで周囲の乗客を軽蔑していたかれが、老婆の行動を見て、() Ⅱ () ことで受けたショックだといえるね。自分が老婆に、席を奪う競争者だと思われたかもしれないと感じたのも、そうしたショックに伴つたものだと思うよ。

早川… なるほど。確かにかれにとっては自滅という感じね。

- 1 ①～③の漢字の読みを書きなさい。
- 2 動揺と熟語の構成が同じものを、次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。
- ア 左右 イ 中央 ウ 視線 エ 不当

3 かれは心から憎みはじめたのであるとあるが、かれが、このような気持ちを抱いたのはなぜですか。その理由について述べた次の文の空欄Ⅰに当てはまる適切な表現を、十字以内で書きなさい。

老婆の近くに腰を掛けている乗客たちが、老婆に席を譲ることもなく(Ⅰ)から。

4 ②③の代名詞「かれ」のうち、示す人物が他の三つと異なるものを選び、その記号を書きなさい。

6 ※1から※2までの部分における、かれの内面についての描写から、かれは、どのような人物であると読み取れますか。本文の内容を取り上げて読み取りの根拠を明確にし、「……ところや、……ところから、……人物であると読み取れる。」という形式によって、あなたの考えを書きなさい。

1 ①～③のカタカナに当たる漢字を書きなさい。

2 に当てはまる最も適切な語を、次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

- ア たとえば
- イ また
- ウ しかし
- エ さらに

3 この競争とあるが、それは具体的にどのような競争ですか。二十字以内で書きなさい。

4 明らかに繁栄している成功者であるとするが、雑草が「競争に弱い」植物でありながら、成功できるのはなぜですか。この文章における筆者の主張を踏まえ、「攪乱」という語を用いて、七十字以内で書きなさい。

5 この文章における、論を進める上での工夫とその効果について、ある生徒が、文章中の①・②の部分を取り上げ、次の表にまとめました。表中の空欄Ⅰ～Ⅲに当てはまる適切な表現を書きなさい。

	①	工夫の みられる部分
	②	工夫
③	（Ⅲ）を述べる。	効果
	具体的な例を挙げて説明する。	
	読み手を納得させ、論に説得力をもたせる。	
	読み手により分かりやすくするようにして、論の説得力を高める。	

問題は、次のページに続きます。

三 次の漢詩は、李白が、旅の途中で洛陽の町に滞在したときに詠んだものです。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

誰家玉笛暗飛声

散入春風滿洛城

此夜曲中聞折柳

何人不起故園情

(書き下し文)

誰が家の玉笛ぞ 暗に

散じて春風に入りて洛城に満つ

此の夜 曲中に折柳を聞く

何人が故園の情を起こさざらん

いったい誰が故郷を思う気持ち起こさずにいられようか

(「春夜洛城聞笛」による。)

(注1) 洛城 || 洛陽の町のこと。
(注2) 折柳 || 曲名。

1 に当てはまる書き下し文を書きなさい。

2 入春風滿洛城とあるが、次の文は、これの表す様子について述べたものです。空欄Iに当てはまる適切な表現を、あとの【漢和辞典の記述】を踏まえ、現代の言葉を用いて二十五字以内で書きなさい。

笛の音が、(I) () 様子を表している。

【漢和辞典の記述】

9画 満 音 マン
12画 訓 みちる・みたす

〈意味〉① いっぱいになる。いっぱいにする。

② 足りる。

③ 一定の期限・標準に達する。

3 ある生徒が、国語の時間にこの漢詩の鑑賞文を書きました。次の【鑑賞文】は、その生徒が書いたもので、【資料】は【鑑賞文】を書くために準備したものです。これらを読んで、あとの(1)・(2)に答えなさい。

【鑑賞文】

この詩の形式は七言(Ⅱ)であり、構成は起承転結になっている。起句、承句までは洛陽の町の情景が詠まれているが、転句を経て結句では旅人である李白の心情が詠まれている。

この詩の巧みさは、字数が限られている中で、転句に「折柳」という語を詠むことによって、詩の内容を情景から心情へと一気に転換させているところにある。「折柳」との関連に着目して結句の李白の心情を解釈すると、「折柳」は、() Ⅲ ()。このように、「折柳」は結句の心情につながっており、わずか二字だが、この詩の中の重要な語だといえる。

【資料】

中国では、むかし、柳の枝を折って旅立つ人におくる風習があった。したがって折柳は旅立つ人との別れの曲とされており、哀調をおびるものであったという。

(高木正一 「唐詩選(中)」による。)

(1) 【鑑賞文】中の空欄Ⅱに当てはまる適切な語を、漢字二字で書きなさい。

(2) 【鑑賞文】中の空欄Ⅲに当てはまる適切な表現を、漢詩と【資料】の内容を踏まえ、「……ので、……といえる」という形式によって、現代の言葉で書きなさい。

四 田中さんの学級では、国語の時間に、落語の噺を班で一つ選び、それを朗読する学習をしています。次の【あらすじ】は、田中さんの班が選んだ噺の結末の部分の前までのあらすじを示したもので、【結末の場面】は、その噺の結末の部分の台本の形式で示したものです。また、【話し合い】は、この学習の過程で田中さんの班が行ったものです。これらを読んで、あとの【問い】に答えなさい。

【あらすじ】

新しい羽織を着て気分よく一人で初天神のお参りに出かけようとしていた親父。息子に見付かり、一緒に連れて行ってくれとせがまれたが、親父は「あれを買って、これを買って。」とねだられるだろうと思っ嫌がる。しかし、息子にしつこくせがまれ、何かを買ってくれとねだらないという約束で連れて行くことになった。

出かけると案の定、縁日の出店を前に息子は「アメを買ってくれ。」と駄々をこね出した。最初のうちは、聞き入れなかった親父だが、とうとう根負けしてアメを買わされ、親父は「やっぱりお前を連れてくるんじゃないか。」とぼやく。その後も団子を買わされ、しまいには高額な爪を買わされてしまう。

買ってもらった爪を、息子がすぐにあげようと言出し、親父は渋々息子と原っぱで爪をあげることにした。

原っぱに着くと、親父は「まず父ちゃんがあげてやろう。」と言つて糸を持って爪あげを始める。すると、爪は見事に高くあがった。

(注) 初天神 天満宮と呼ばれる神社の新年最初の縁日。

【結末の場面】

親父… どうだい、あがったろ。
息子… わあは、あがった！ あがった！ あがった！
親父… こうやって、おめえ、呼吸であげるんだぞ……。しかし上の方が風があると見えて、どんどん糸が出てっちゃうなあ。もつとどつきり、糸オ買つときゃよかったよな……。ブーンブーンブーン。どうだい、すげえだろう！
息子… お父つあん、あがったい、あがったい！
親父… お父つあんの子供の時分なんざあなあ、がんぎりなんてえもんをつけてな、爪同士でけんかさしたもんだよ。お父つあんなは、いっぺんだって負けたことあねえんだ。
息子… やあつ！ お父つちゃん、あがったから早く持たしとくれよ。ねえ、持たしとくれよ！
親父… うるせえな、ちきしょう！ うるせえつてんだようつ！
息子… お父つちゃん！ あたいの爪じゃねえか！
親父… こういうもんなは、子供の持つもんじゃねえ！
息子… なんでえ！ こんなことなら、お父つちゃん連れてこなきやあよかった……。

(落語協会編 「古典落語③」による。)

(注) がんぎり 其他の爪の糸を切るために、自分の爪糸に取り付ける仕掛け。

【話し合い】

田中… 今日は、前回の授業で考えた部分に続いて、【結末の場面】をどのように朗読するかについて考えるのだったよ。

上野… 確か前回、場面の様子が聞き手の目に浮かぶような朗読をするために、まずは、登場人物のどのような様子を伝えたらよいかを考えることが大切だと確認したよ。

末広… そうだね。あと、聞き手がこの噺の面白さを感じられるようにするために何がポイントか、ということについても話し合つて、噺の全体の展開からすると、【結末の場面】においては、親父のせりふがポイントだという話になったよ。

田中… 確かにそういう話をしたね。では、まず、親父について、この場面を通してどのような様子を伝えたらよいか、各自で意見をまとめて出し合おう。

【問い】

田中さんは、【話し合い】を踏まえ、この噺の面白さを感じ手が感じられるような朗読をするために、【結末の場面】の親父について、どのような様子を伝えたらよいか、その理由も含めて意見を出すことにしました。あなたならどのような意見を出しますか。次の条件1〜3に従って、その意見を書きなさい。

条件1 二段落構成とし、第一段落には親父について、どのような様子を伝えたらよいかを書き、第二段落にはそのように考えた理由を書くこと。

条件2 理由には、この噺の面白さがどのようなところにあるのかについて、【あらすじ】・【結末の場面】のそれぞれの内容を取り上げて述べること。

条件3 二百五十文字以内で書くこと。

